

2.5 降雹のアンケート調査

報道された雹粒の直径 3 cm というのは、少なくともこれまでの北海道では観測例のないことから、降雹の範囲および各地での大きさを把握するために、レーダーデータをもとに最大エコー強度を記録したコースを狭む札幌市および石狩、空知支庁管内の各学校を対象にして、降雹の有無およびその時間と雹粒の大きさ等についてのアンケート調査を行った。第 3 図はその結果を示している。この図から、少なくとも降雹は直径数 km に及ぶ範囲の複数の地域にあったことがわかる。星印は竜巻の位置である。

2.6 雹粒の採集

一般に降雹現象は、狭い範囲とその短時間のために、採集、保存されることは稀である。しかし、今回は、日中のしかも市内域ということもあって、採集、保存者があり提供を受けることができた(第 4 図)。

3. おわりに

今回の降雹、竜巻の発生は、ウィークデイの日中で、しかも市内域ということもあって、現地調査の際にも多くの方々が、いろいろな記録をとっていることで、幸運

なケースであった。また、それらの記録の多くは私共に提供された。それにしても、カメラは当然として、ビデオ等がこれまでも普及し、しかも即座に突発的な気象現象に対処したという関心の深さ、またこの種の研究の調査方法に心強いものを感じた。これらのデータを使った研究は現在進められており、近い内に報告する予定である。

謝 辞

今回の私達の研究に対して、雹粒を提供された札幌市白石区の妹尾桂子さん、竜巻のビデオを提供された長沼中央小学校の猪野晏幸先生、竜巻の連続写真のネガを貸与された高橋建設㈱の高間裕一氏と千歳市中央の小山孝則氏に厚く感謝いたします。また、アンケート調査に御協力下さった札幌市内および石狩、空知管内の各小、中、高校の関係者にも御礼申し上げます。

参考文献

小林文明・岩波 越・菊地勝弘, 1987: 1985年9月10日北海道広島町に発生した竜巻について, 北大地球物理学研究報告, 48, 17-33,

第12回極域気水圏シンポジウムのお知らせ

南極域においては、現在第30次観測隊により「南極域における気候変動に関する総合研究(ACR)」が実施されており、国内においては、当研究所を中心に氷床コアの分析や、衛星データの解析、オゾンホールや氷床変動の研究が続けられております。つきましては、極域における気象学、雪氷学、海洋学に関連する研究成果と今後の研究の展望について議論すべく、右記によりシンポジウムを開催いたします。ふるって御参加下さい。

記

日 時: 1989年7月18日(火)、19日(水)

場 所: 国立極地研究所、講堂

発表申込締切: 4月28日

連絡先: 国立極地研究所、気水圏シンポジウム係

〒173 東京都板橋区加賀 1-9-10

電話 03 (962) 4711

FAX (962) 2529

事務局からのお知らせ: 平成元年度秋季大会の航空便・宿泊ホテル等の申込用紙は6月号に掲載いたします。